

内外交差点

自由化至上主義の「洗濯」 高市早苗総理がなすべき改革

藤井 聰氏 (京都大学大学院教授) 第9/12回

この度、総理大臣に指名された高市早苗総理は、自民党総裁選の折りに『日本を今一度洗濯申し候』という有名な坂本龍馬の言葉を引用しつつ、我が国政府に蔓延っている様々な日本の国益を毀損し続ける過てる様々な仕組みやその背後にある思想を見つけ出し、それらを一つ一つ「正しき方向に矯正」することを、事実上の「総裁選公約」とした。そして彼女は実際に、「緊縮主義」こそが日本に仇する「洗濯」すべき悪しき「汚れ」であると見定め、その正反対の「積極財政」を最も重要な政権方針に掲げた。

それでは、タクシー業界にはどんな「洗濯」すべき「汚れ」がこびり付いてしまっているのかと言えば、それは勿論「規制緩和至上主義」あるいは「自由化至上主義」なる思想だ。

「規制緩和至上主義」だとか「自由化至上主義」と言えば長ったらしく少々分かりづらいかもしれないが、それは要するに、「業界にある規制は兎に角取っ払えばそれでいい。そうすれば、民間の活力を活用して、タクシー業界は活性化する」なる信念だ。

例えば、かつて、昭和時代に作り上げられたタクシー業界には、運輸省による「需給調整」があった。

これは、それぞれの地域毎にタクシーの客がどれくらいいるのかという「需要」を役所が把握し、その「需要」にあわせてタクシ一台数の「上限」を決める、という仕組みだ。そして役所は、その「上限」以上にタクシ一台数が増えてしまうことを回避するために、既存のタクシー会社のそれぞれについて、運行可能なタクシ一台数を決定し、そのタクシ一台数でのタクシー事業運営を会社ごとに「許可」していた。さらには、新しいタクシー会社がその地域で営業開始を希望してきた場合には、そのタクシー会社の「参入」によって、それぞれの地域毎に決定した「タクシ一台数上限」を上回らない場合に限り、その営業申請を「許可」する一方、「タク

シ一台数上限」を上回る場合には、その営業申請を「許可しない」という形で、役所が許認可する、という仕組みを厳密に運用していた。



タクシー会社以外の人間がこういう長ったらしい仕組みを耳にすれば、即座に次のように思ってしまうこととなろう。「なんだその得体の知れない規制は!? 結局そんな規制は全部、既存のタクシー事業者達の既得権を守るだけの業界ベッタリの悪しき規制じゃないか! そんな規制ばっかやってるから、タクシー料金はどんどん高くなつて、結局消費者が一番損しているじゃないか! しかも、やる気のある立派な新しいタクシー会社が新しいアイディアでタクシー事業をやろうとしても、それが邪魔立てされてしまうじゃないか! そうなればタクシー業界が延々と旧態依然とした効率の悪い古臭いままの状況になつてしまい、最終的に損をするのはやっぱり消費者だってことになっている。そんな馬鹿馬鹿しい需給調整のための規制なんて、全部辞めちまえばいいじゃないか!」

—実際、我が国では、20世紀後半、こうした声に圧倒される形で、役所は許認可制度を止めてしまい、タクシ一台数が好き放題に増えても良いようになってしまった。

その結果どうなったと言えば、タクシ一台数がどんどん増えてしまい、需給のバランスは失われ、タクシ一台数過多になってしまったわけだ。そうなれば当然、タクシ 1 両あたりの水揚げは落ち込み、タクシードライバーの給料はどんどん下落していく事になったのだ。

実に馬鹿しい話だが、ハッキリ言ってそんな「自由化至上主義」「規制緩和至上主義」の発想は、タクシー業界の内実を何も知らない素人の勝手かつ無責任な思いつきなのだが、実際にそんな素人の思いつきによってタクシー業界の秩序は20世紀後半から完全に破壊されるようになってしまったのだ。

だからこそ、そんな「自由化至上主義」「規制緩和至上主義」の発想そのものを、高市政権は「洗濯」の対象として洗い流さねばならないのだが——この詳細はまた、次回詳しく解説することとしよう。